

トビウオ通信 (R7 第3号)

<https://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/> (TEL 0855-22-1720)

《令和7年度上半期浮魚中長期漁況予報》

2024年度第2回対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類長期漁海況予報^{※1}（令和7年3月27日発表 国立研究開発法人水産研究・教育機構（以下、水産研究・教育機構））の内容を基に、山陰沖のまき網漁業が対象とする主要浮魚の令和7年度上半期（4月～9月）の中・長期的な漁模様の予測をしました。

※1：https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2024/files/20250327_ukiuo-tsushima-2nd.pdf

山陰沖における漁況(来遊)予報〔令和7年度上半期(4月～9月)〕

マアジ:前年並みか前年を上回る マサバ:前年並み

マイワシ:前年を上回る ウルメイワシ:前年並み

カタクチイワシ:前年並みか前年を下回る

- 本文中で「上半期」は4月～9月、「下半期」は10月～翌年3月（令和7年3月は速報値）
- 東シナ海～日本海の漁況：「平年」は過去5年（令和元年度～令和5年度）の平均値、「前年」は令和5年度
- 今後の予報：「平年」は過去5年（令和2年度～令和6年度）の平均値、「前年」は令和6年度

マアジは前年並みか前年を上回る

東シナ海～日本海の漁況

鹿児島県から山口県までの沿岸域における令和6年11月～令和7年1月の漁獲状況は、前年を上回り、平年並みでした。また、島根県から青森県までの漁獲状況は、前年・平年を上回りました。

島根県の中型まき網によるマアジの漁獲量は、平成20年度から平成30年度にかけて、約2万～4万トンで推移していましたが、直近4年は1万トン前後で推移しています（図1）。令和6年度下半期は4,324トンで、前年同期（4,528トン）の96%、平年同期（3,569トン）の121%でした。

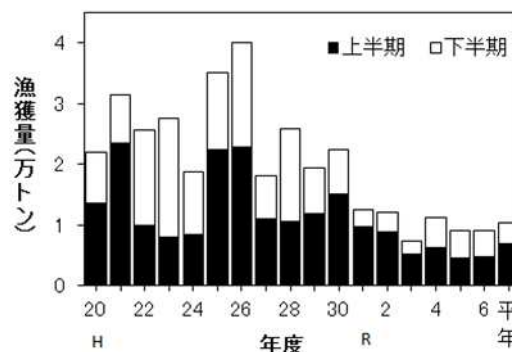


図1. 島根県の中型まき網によるマアジ漁獲量の推移（平年はR1～R5の平均値）

今後の予報

水産研究・教育機構によると、令和 7 年度上半期の日本海の漁況は前年並みで、平年を下回ると予測しています。山陰沖における令和 7 年度上半期の漁況は、漁獲の主体となる 1 歳魚（大きさ 15～22 cm：令和 6 年生まれ）と 2 歳魚以上（大きさ 22 cm 以上：令和 5 年以前生まれ）の山陰沖への来遊状

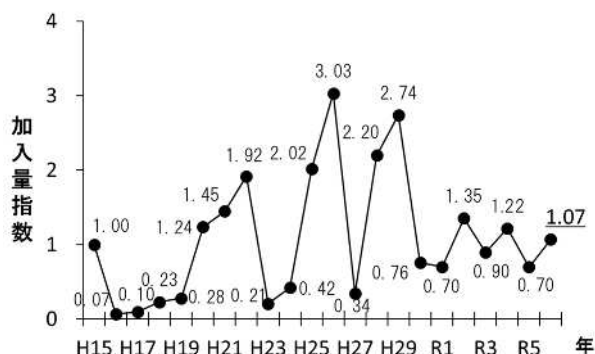


図2. マアジ新規加入量調査による加入量指数※3

況と夏季以降に漁獲対象となる 0 歳魚（大きさ 5～15 cm：令和 7 年生まれ）の加入状況によって決まります。前年のマアジ新規加入量調査※2の結果（図 2）から、1 歳魚の資源水準は前年並みか前年を上回る、2 歳魚の資源水準は前年を下回ると予測しています。また、0 歳魚の資源水準を予測するのは困難ですが、日本海の漁場形成に大きく関係する東シナ海におけるマアジの稚魚の分布量と高い正の相関が見られる 4 月半ばの東シナ海的好適水温帯面積は、令和 7 年は前年を上回ると見込まれており、親魚となる 1～2 歳魚の資源量も安定していることを考慮すると 0 歳魚の資源水準は前年並みと考えられます。このことから、令和 7 年度上半期の山陰沖の漁況は、前年並みか前年を上回ると予測します。

※2 マアジ新規加入量調査：マアジ 0 歳魚の加入量を早期に把握するための調査

※3 加入量指数：マアジの新規加入量調査においてその年の 0 歳魚の加入量を数値化したもの。なお、平成 15 年を 1 としている。

マサバは前年並み

東シナ海～日本海の漁況

鹿児島県から山口県までの沿岸域における令和 6 年 11 月～令和 7 年 1 月の漁獲状況は、前年・平年並みでした。また、島根県から青森県までの漁獲状況は、前年・平年を上回りました。

島根県の中型まき網によるサバ類（島根県で漁獲されるサバ類はほとんどがマサバ）の漁獲量は、平成 20 年度から 30 年度までは概ね下半期が盛漁期であり、平成 26 年度を除いて 1 万～2

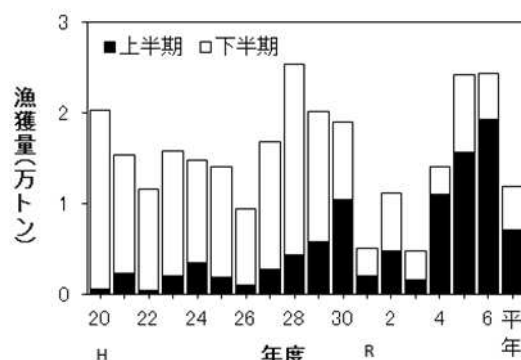


図3. 島根県中型まき網によるサバ類漁獲量の推移（平年は R1～R5 の平均値）

万トンで推移しました。令和元年度と令和 3 年度は 5 千トン程度まで減少しましたが、令和 4 年度以降は、上半期の漁獲量が下半期を上回る漁獲パターンに変わるとともに漁獲量の増加傾向が続き、令和 5 年度と令和 6 年度は 2 万 5 千トン近くに達しました（図 3）。令和 6 年度下半期の漁獲量は 5,038 トンで、前年同期（8,515 トン）の 59%、平年同期（4,820 トン）の 105%でした。

今後の予報

水産研究・教育機構によると、令和 7 年度上半期の日本海の漁況は前年並みで、平年を上回ると予測しています。山陰沖における令和 7 年度上半期の漁況は、1 歳魚（大きさ 26～32cm：令和 6 年生まれ）と 2 歳魚以上（大きさ 33 cm 以上：令和 5 年以前生まれ）が漁獲の主体となり、夏季以降は 0 歳魚（大きさ 25cm 以下：令和 7 年生まれ）も漁獲されます。各関係機関の調査により、0 歳魚～2 歳魚の資源水準はそれぞれ前年並みと予測しています。また、本県では令和 4 年度から 6 年度にかけて上半期は好漁が続いていることから、令和 7 年度上半期の山陰沖の漁況は、好調だった前年並みと予測します。

マイワシは前年を上回る

東シナ海～日本海の漁況

鹿児島県から山口県までの沿岸域における令和 6 年 11 月～令和 7 年 1 月の漁獲状況は、前年・平年を上回りました。また、島根県から青森県までの漁獲状況は、前年・平年を上回りました。

島根県の中型まき網によるマイワシの漁獲量は、平成 20 年度～平成 22 年度は低調に推移しましたが、平成 23 年度に増加し（図 4）、平成 26 年度を除いて約 1 万～4 万トンで推移しています。

令和 6 年度下半期の漁獲量は 17,321 トンで、前年同期（12,951 トン）の 134%、平年同期（13,031 トン）の 133%でした。

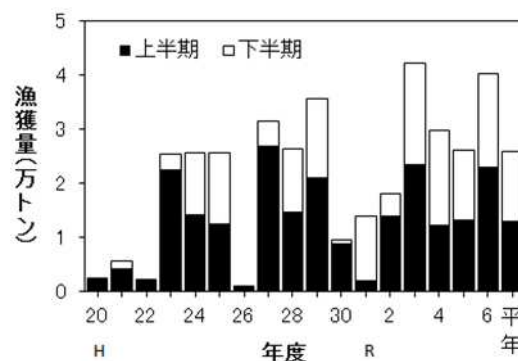


図 4. 島根県中型まき網によるマイワシ漁獲量の推移（平年は R1～R5 の平均値）

今後の予報

水産研究・教育機構によると、令和 7 年度上半期の日本海の漁況は、前年・平年を上回ると予測しています。山陰沖における令和 7 年度上半期の漁況は、漁獲の主体となる 1～3 歳魚（大きさ 16～22 cm：令和 4 年～令和 6 年生まれ）と夏季以降の 0 歳魚（大きさ 15 cm 以下：令和 7 年生まれ）の来遊量で決まります。3 歳魚の資源水準は前年並みで、2 歳魚は前年を上回り、1 歳魚は九州北西沖における産卵調査や日本海におけるトロール調査の結果から前年並みと考えられます。0 歳魚の資源水準の評価は難しいですが、親魚となる 1 歳魚以上の令和 6 年度下半期の漁況から判断すると、前年並みか前年を上回ると予測します。

以上に加えて、本県の中型まき網で漁獲されるマイワシは 2 歳魚までが主体であることを考慮すると、令和 7 年度上半期の山陰沖の漁況は、前年を上回ると予測します。

ウルメイワシは前年並み

東シナ海～日本海の漁況

鹿児島県から山口県までの沿岸域における令和6年11月～令和7年1月の漁獲状況は、前年・平年を上回りました。

島根県の中型まき網によるウルメイワシの漁獲量は、平成28年度までは下半期の漁獲量が上半期を上回る傾向にありましたが、平成29年度以降はその逆となる傾向にあります。特に令和3年度以降は漁獲量の大部分を上半期が占め、下半期の漁獲量は減少傾向にあります（図5）。令和6年度下半期の漁獲量は1,805トンで、前年同期（3,202トン）の56%、平年同期（1,784トン）の101%でした。

今後の予報

山陰沖における令和7年度上半期の漁況は、1～2歳魚（大きさ15cm以上：令和5年～令和6年生まれ）と夏季以降の漁獲に加わる0歳魚（大きさ5～15cm：令和7年生まれ）が漁獲の主体となります。1歳魚の資源水準は、各関係機関が実施した中層トロール調査等から前年並みと予測しています。0歳魚の資源水準を予測するのは困難ですが、鹿児島県から山口県までにおける令和6年度下半期の漁況から前年並みと考えられます。以上より、令和7年度上半期の山陰沖の来遊量は前年並みであり、漁況も前年並みと予測します。

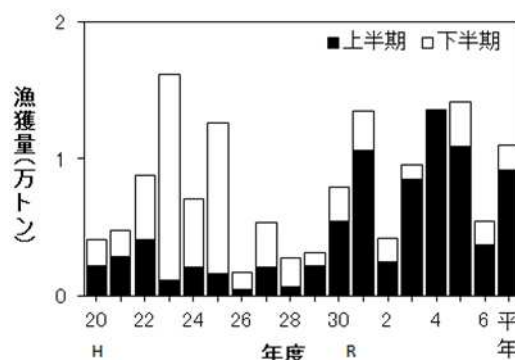


図5. 島根県中型まき網によるウルメイワシ漁獲量の推移（平年はR1～R5の平均値）

カタクチイワシは前年並みか前年を下回る

東シナ海～日本海の漁況

鹿児島県から山口県までの沿岸域における令和6年11月～令和7年1月の漁獲状況は、前年・平年を下回りました。

島根県の中型まき網によるカタクチイワシの漁獲量は、平成24年度までは、平成21年を除き1万トンを超えていましたが、平成25年度以降は減少傾向が続いています（図6）。特に、令和4年度以降は上半期、下半期ともに不漁が続き、100トンを下回っています。令和6年度下半期の漁獲量は94トンで、前年同期（40トン）の232%、平年同期（531トン）の18%でした。

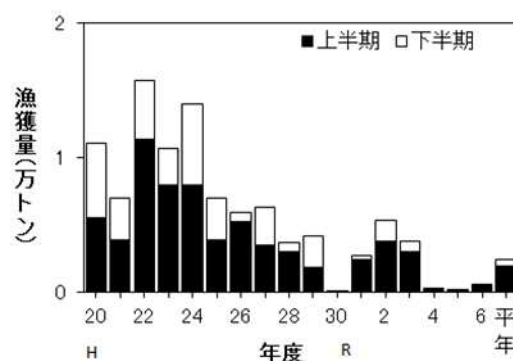


図6. 島根県中型まき網によるカタクチイワシ漁獲量の推移（平年はR1～R5の平均値）

今後の予報

山陰沖における令和 7 年度上半期の漁況は、春から初夏にかけては令和 6 年春季発生群、令和 6 年秋季発生群及び令和 7 年春季発生群（0～1 歳魚、大きさ 5 cm 以上：令和 6 年～令和 7 年生まれ）、夏季以降は成長した令和 7 年春季発生群（0 歳魚、大きさ 4～8 cm：令和 7 年生まれ）が漁獲の主体となります。各関係機関の調査により、令和 6 年春季発生群及び令和 6 年秋季発生群の資源水準は、それぞれ前年を下回ると予測しています。令和 7 年春季発生群は予測が困難ですが、前年並みと仮定した場合、全体の来遊量は不漁だった前年を下回ると考えられます。島根県でも不漁が続いていることから、令和 7 年度上半期の山陰沖の漁況は不漁だった前年並みか前年を下回ると予測します。